

## 環境教育を通じた地域資源の理解と活用

\* 上田尚志<sup>1</sup>

### Understanding and utilization of regional resources through environmental education

\* Hisashi Ueda<sup>1</sup>

<sup>1</sup> Specified Non-profit Organization Citizen's Institute of Oriental White Stork, 127, Shounji, Toyooka, Hyogo Pref., 668-0814 Japan

#### はじめに・・象徴としてのコウノトリ

今、豊岡で進められているコウノトリの野生復帰プロジェクトは、コウノトリという鳥の野生復帰にとどまらず、生物多様性の世界を取り戻すことはもちろん、農業や観光、環境経済にいたるまで様々な広がりを持って進んでいる。

私たちは、コウノトリを象徴に人と自然の関係を取り戻すことを目標に活動をしている。地域の自然はそれぞれの地域ごとに異なった特徴を持っており、人と自然のかかわりも近年まで一つの文化として受け継がれてきた。コウノトリの絶滅と期を同じくして、人々の自然についての知識はやせ細り、自然からの恩恵や自然の脅威も忘れられがちになった。

自然は様々な脅威を人間に与えるが、同時に様々な価値をもたらしてくれるものでもあるという基本認識のもとに、市民活動として生物調査や様々な自然体験を通して、地域の自然の現状や人と自然とのかかわりを再発見していこうと考えている。広い意味での環境教育という分野にはいるかもしれない。

#### 豊岡盆地の生き物調査

1998年、コウノトリの郷公園が開園する前の年、私たちは地域の自然を研究してきたメンバーを中心にコウノトリ市民研究所を立ち上げた。最初に取り組んだのは、タンポポ、アカトンボ、ホタル、メダカなどの身近な生物の生息調査であった。市民参加行事として月1回程度の調査を実施した。それは様々な発見の連続であった。豊岡盆地の在来タンポポはカンサイタンポポではなくヤ

マザータンポポであること、アキアカネに混じってノシメトンボというアカトンボが急増していること、ゲンジボタルが市街地近くにもいること、メダカがコンクリート水路でもたくさん生息していることなど、興味深い事実が次々に明らかになった。これらの記録は「豊岡盆地の生き物地図 1999」、その改訂版「豊岡盆地の生き物地図 2011」にまとめ、広く関心がある市民に配布した。また、豊岡盆地の稀少生物についても研究員の調査活動として継続し、2012年に「豊岡盆地と円山川下流域のRD生物」をまとめた。

このような人里の生物の調査は、私たちに様々な問題意識を与えてくれる場となり、人の生活と生物の関係を具体的に学ぶ場として大変有効であったと思う。

#### 田んぼの学校

2001年休耕田に水を張ったビオトープを設置し生物調査を実施した。カエル、ドジョウ、トンボのヤゴ、様々な水生昆虫が現われた。ここは野生コウノトリ、ハチゴロウが始めて降り立った記念すべきビオトープとなったわけだが、私たちはここで2002年より、子どもたちによる生物調査である田んぼの学校を始めた。2001年の調査に参加した子どもたちがとても楽しそうにしていたことが一つの動機となって、裸足で田んぼに入って生き物を探して遊ぶ生物調査を田んぼの学校として実施することにした。

開校式には250名の親子が集まりその関心の高さを示した。それから10年余りが経ち、子どもたちは入れかわったが、春の田んぼの調査では100人を超える親子が集まる。当時の子どもたちは高校生や大学生となり、当時高校生として関わっていたメンバーは社会人として市民研の活動を引き継いでいる(図1)。

これらの取り組みは「田んぼの学校フィールドノート」としてテキスト化し、豊岡市内のすべての小学3年生に配布している。

この田んぼの学校を通してわかったことの1つは、子どもたちは自然の中で飽きもせず夢中になって遊ぶということである。子どもたちが自然の中から何かを見つけたり、捕まえたりすることに夢中になるのは本能的なものではないかとさえ思えてくる。子どもたち自身が自然

<sup>1</sup> 特定非営利活動法人コウノトリ市民研究所  
668-0814 兵庫県豊岡市祥雲寺127

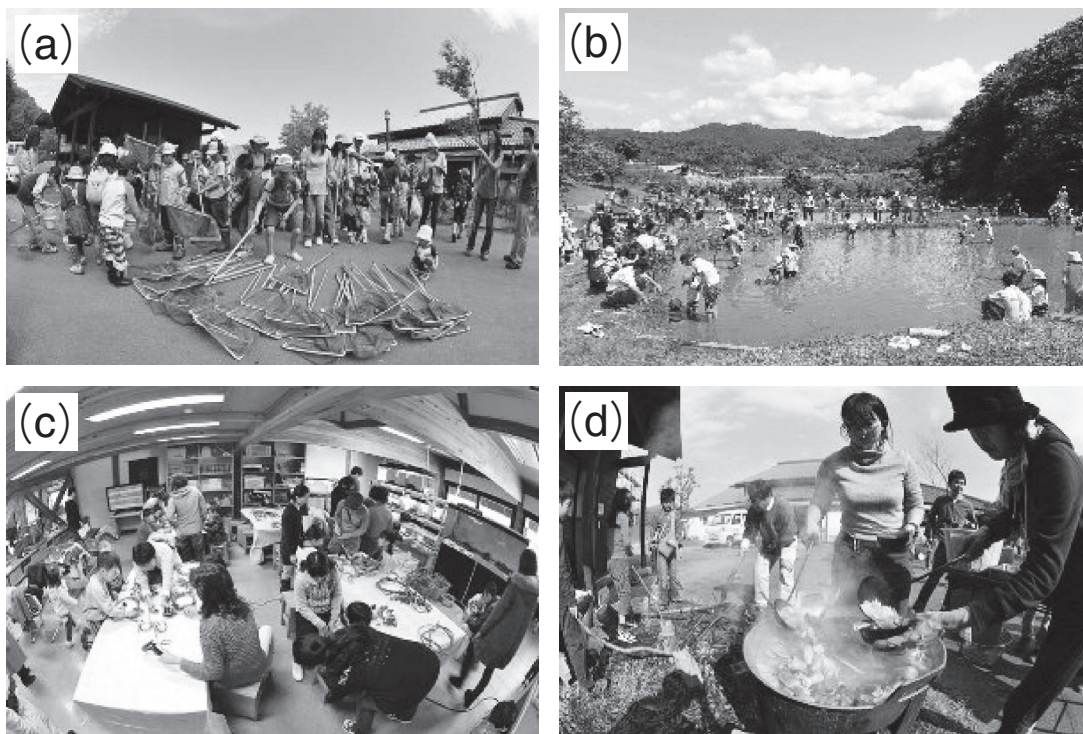


図1. 田んぼの学校開催の様子. コウノトリ文化館での準備 (a), ビオトープ調査 (b), クラフト作り (c), 大鍋作り (d)の様子.

の中で遊ぶことの楽しさを発見し、まわりの大人たちがそれを子どもの成長にとって大切なものなのかも知れないと考え始めたことが、田んぼ学校の大きな意味であったと思う。それは、身近に豊かな自然があることの1つの「価値」であり、そのような機会と場所を提供していくことが大人の責任であると思う。

2つ目は、自然というのは様々な魅力的な素材にあふれているということの発見である。木の実や葉っぱ、木切れ、チョウ、トンボ、カメ、ヘビ、何でもよく見るとものすごく魅力がある。そういうことに子どもも、大人も気づいたことは大きなことだった。

### 出張！田んぼの学校

田んぼの学校の参加者の中から、自分たちの地域で田んぼ学校をやってほしいという要望が出るようになった。小学生の遊び場は基本的には家の周りであるべきだ。そうすることによって、大人も含めて地域の自然を見る目が変わるかもしれない。私たちは豊岡市のコウノトリ共生課とともに、子どもたちの住む地域で田んぼの学校を実施することを考えることにした(図2)。

現在この「出張！田んぼの学校」は豊岡市のコウノトリ共生課を窓口に応じ、市民研が講師派遣される形をとっている。今年度は14回実施したが、公民館、農業者グループ、子ども育成会など地域の様々な主体によ

て実施される。このように地域の大人が、場所を探し、子どもたちを集め、実施すること自体が大変意義があることと考える。

### 私たちの環境教育の基準

今、豊岡市では学校教育を含め、様々な形での環境教育が実施されている。私たち自身も小学生から高校生(図3)、大学生、大人まで様々な人たちを対象に関わりを持ってきた。そのような中で、対象によって課題を区別しないと混乱をきたすことを感じてきた。私は、これまでの体験から環境教育を4つの段階に分けて考えている。

第1は、自然の中で遊び感じる段階。これはおもに小学生。習慣化などもここに入るかもしれない。第2は、事実を知り問題意識を持つ段階。高校生ぐらいになると、具体的な事実に実際に触れ、感じ、考え、頭の中を疑問でいっぱいにしてほしい。第3は、解決への探求の段階。問題を解決するためには現代社会のあり方も含めた総合的な知識が必要となる。幅広く知識を集め総合化することこそ大学生の使命だと考える。第4は様々な実践の段階。実際に責任を持って行動するのは大人の役割である。もちろん、あくまで発達段階ごとの主要な課題という意味で、やってはいけないことではない。

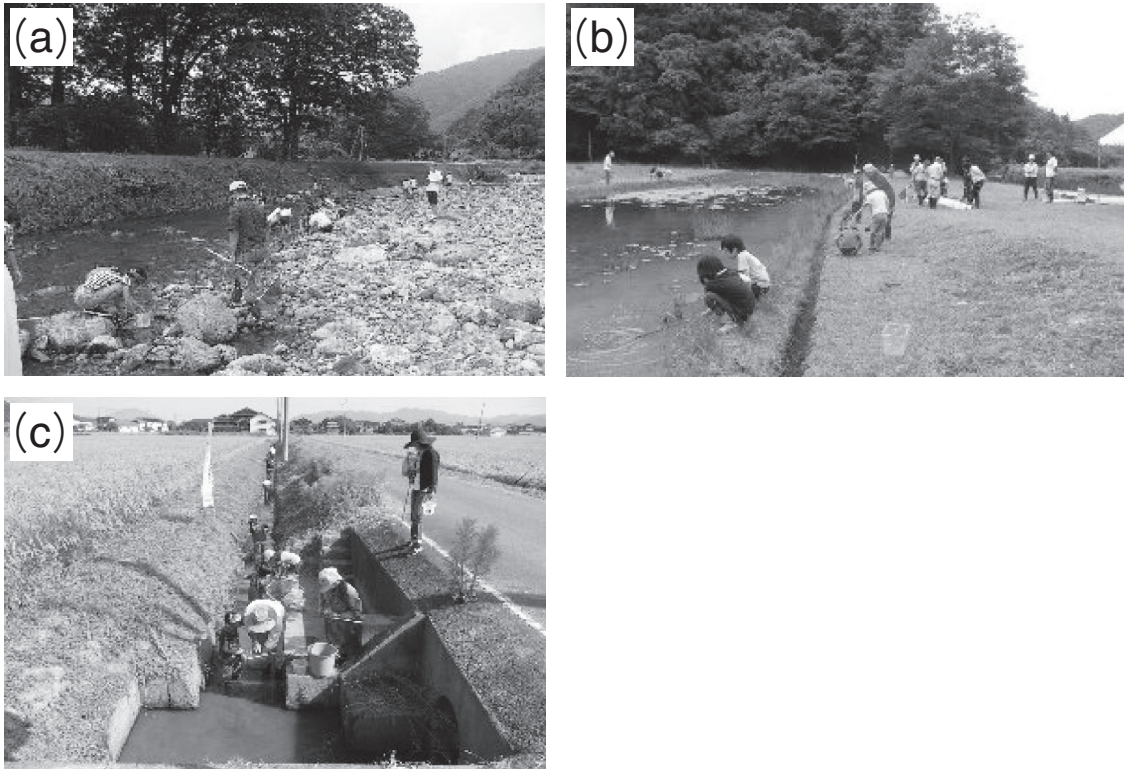


図2. 出張田んぼの学校での生物調査の様子. 奥山川 (a), 気比ビオトープ (b), 中筋用水路 (c) における開催.



図3. 戸島湿地における高校生による生物調査の様子.

### おわりに・・・コウノトリと地域

私たちはもともと但馬の自然の研究や自然保護に関心を持って活動をしていた。その中で、過疎化が進む農山村では特定の生き物を守る活動というのは、どうしても浮き上がってしまうことを感じていた。そういう中で、

自然保護というのは地域づくり全体の中で進めていくべきだと考えるようになった。私が個人的にはあまり関心が高かったコウノトリと関わるようになったのは、このころからである。自分の住んでいる地域の課題として、コウノトリを象徴に人と自然の関係を取り戻すというテーマは私の考えに合致した。

コウノトリが絶滅したのは1960年代から1970年代という高度成長の時代である。生活は便利になり、私たちはたくさんの物を得たが、一方で失ったものもまたたくさんある。そしてコウノトリもその1つであると考えたとき、コウノトリを取り戻す運動の中で、生物多様性の世界を取り戻し、さらに様々な分野の、失ってはいけないものを取りもどす取り組みを同時に進め、私たち市民が地域の主人公としてよりよい地域づくりを進めていくことが求められる。豊岡市民は、全体としてその方向に動いていると私は感じている。

(2014年2月4日受理)

